



リステラス星圏史略

古資料ファイル 5-2-5-0-X

「街の外れの高い壁」
（「会田サン」 ver.）
（没原稿）（1987）

（発掘整理一旦完了）

霧樹里守 is 土岐真扉
as 榎 真谷人 ⇒ 遠野 真谷人

「烏合の衆、邂逅」 （街のはずれに高い灰色の壁がある） （高校？）

「烏合の衆、邂逅」 （街のはずれに高い灰色の壁がある） （高校？）

2016年9月29日 [リステラス星圏史略](#) （創作） [コメント \(1\)](#)

「烏合の衆、邂逅」

（街のはずれに高い灰色の壁がある）

何処を間違ってしまったのか... 彼は闘い続けていた。

チェーンや、メリケンサック、ジャックナイフ。

御馴染みの凶器が無数に視界を飛び回る。

手にしているのが1本の鉄パイプきりとは言え、彼は決して負けてはいなかった。

少なくとも今はまだ。

.....不利だ。

彼の動物的な勘が警報を鳴らしている。

有利な足場を、逆転のチャンスを、探し求めて深夜の街路を乱闘の場は移動して行った。

逃げようという考えが思い浮かばないのはいつもの事だ。とは言えこのまま走り闘い続けられる訳もないのは、目に見えていた。

「糞っ!!」

彼は毒づく。

もともとが市街の外れで始められた騒動だ。

意図とは逆に追いつめられて行くのは〇市の北辺、何処ぞの重工の口上と研究施設以外に何も無いと言う、彼のこれまで訪れた事のない地帯だった。

道の突き当たり、高い塀の手前でいきなりダッシュする。

積んである木箱を足台にして彼は跳んだ。

刑務所をでも想わせるコンクリに有刺鉄線の堅固な塀だ。

.....跳びきれるか...?!

不安が頭を掠めた瞬間、服の裂け散る音がして何かの衝撃が襲った。

しかし直ぐに彼は本能的に身を翻し、すたりと、無傷で身長に優る3倍はある高所から降り立っていた。

すかさず背後の追手の気配を窺う。

逃げなければならない。

何故か、不意に彼はそう考えていた。

塀を乗り越えようという騒ぎが聞こえる。

先頭切った1人が木箱に登り、頂部の鉄線に手を伸ばした。

と、

「ギャアアアッ!!」

凄まじい悲鳴を残して、男は、高圧電流に感電して燃え上がっていた。

恐ろしい光景がそれ自らの放つ炎で闇に浮かび、周囲を照らす。

沈黙... それに次いで、塀の外では混乱と敗走が始まろうとしていた。

いずれタチの悪いチンピラ予備軍どもの集まりである。

つい今しがたまで仲間の1人だったモノを、たすけ降ろそうとなど考えつく筈もなく、ただただ予想外の異常事態から、目の当たりに見た凄惨な死の恐怖から、逃げだそうとする本能が先に立っていた。

それを、逃げて行こうとする怯え切った小獣達を、見送る様に豆を弾くに似た音が軽く断続して響いた。

彼はそれを聞いた事がある。

軽機関銃の発射音なのだ。

短い悲鳴が幾つも空を裂いては同時に消えて行った。

「………全員殺ったか？」

「は。」

「死体を直ぐに始末させろ。絶対に痕跡を残すな。」

闇を伝わって塀の向う側から低い声が届く。

声は、こんな夜更けに街外れに突進して来たのがただの不良学生達と知るとその理由をいぶかしんでいるようだったが、やがて死体処理班達と共に遠去かって行った。

ざわりと、彼の背筋を悪感が走る。

逃げなければならない… しかし、塀のこちら側には。

足掛かりになりそうな低い立木一本、見当たりはしないのだ。

0

空っとぼけた貌の男が

(未完)

町のはずれの高い壁

榎 真谷人☆

どこをどう間違ってしまったのか...

彼は、たたかいつづけていた。

チェーンやメリケンサック、ナイフに釘のはえた角棒。

そんな、おなじみの凶器が、わずかな街灯のあかりのなかでひるがえる。

キリがない。

が、手にしているのが鉄パイプの一本だけとはいえ、彼はけして負けてはいなかった。

すくなくとも今はまだ。

.....不利だ。

動物的なカンが警鐘を鳴らしている。

まさかこんなに大勢、とは思わなかった。

読みがあまかったのだ。

すでに二十人ちかくは、たたき伏せ、骨折の数ヶ所はかかえて苦痛にのたうっているにしても

...

のこり、その三倍にちかい群れをどう始末しろというのだ。

「くそっ！」

有利なあしばを、逆転のチャンスを、探し求めて深夜の戦場はじりじりと移動していた。

~~乱闘の街路を、突破して逃げようという考えがうかばないのはいつものことだ。~~

~~とはいえこのまま走りつづけてもいられないのは、目にみえていた。~~

(三十六計

彼はまだ少年である。

子供といってもいいくらいだ。

中学二年生になったばかりの、なにも知らない人間なら十四歳というその年齢だけで判断するしかない。

けれど、ひとめ見ればだれの評価でも、変わらざるをえない。そんな外見をしていた。

ずばぬけた長身である。

細い。

しかしそれは鍛えこまれたあまり、結果としての細さであって、全身から放出される瞬発力、そしてすでに小半時を息ひとつ乱さず闘いつづける持続力。

長身のゆえに筋肉がついてなお、背の高さのほうが目立つというだけなのである。

高校生や、それに準じるドロップアウトの連中をあいてにして、彼より高いものといえれば数えるほどしかいない。

伸びる、うで。

蹴る、あし。

するどい動作はなんの流派とも知れない、けれど完璧に型をふまえた、天性と鍛錬のたまも

のだった。

夜目に白い肌は日本のものではない。

ハーフである。

のびかげんの蓬髪も、凶眼とよばれるだろう瞳も、無造作な薄茶色をしている。

"鬼" と、江戸や鎌倉のひとであれば評しただろう。

凄惨な、ゆがんだ冷笑をはりつかせ、秀麗な貌だちの、それにしても美しい鬼ではあった。

もとはといえば縄張り争いではある。

引っ越して来てから一年半たらずの間に、どんな誘いにも脅しにも関心すら払わず、sのくせ気にくわない者があれば情け容赦もなく叩きつぶす。

そんな彼への反感と恨みから、市外のグループまでをまきこんでの、O市総番からの、これは殴りこみだった。

「くそっ！」

彼はふたたび毒づく。

もともとが市街地のはずれではじめられた騒動だ。

意図とは逆に追いつめられていくのはO市の南西、どこかの重工の倉庫と研究室以外はなにもないという、これまで彼があしを踏み入れたことのない地帯だった。

道のつきあたり、高い塀のてまえでいきなりダッシュする。

積んである木箱を足台にして彼は跳んだ。

刑務所をでも思わせる、コンクリートに二重の有刺鉄線を植えた堅固な壁だ。

.....跳びきれるか...!?

不安があたまをかすめた瞬間、服の裂ける音がして何かの衝撃が襲った。

しかしすぐに彼は本能的に身をひるがえし、すたりと、無傷のまま、身長のように三倍はある高さから降りたっていた。

すかさず闇の中へはしりこみ、背後の追手の気配をうかがう。

だけではない。

なぜか、一步この壁のなかへ踏みこんだ瞬間から、とてつもなく"嫌な予感"というやつが彼の全身をとりかこんでいた。

扉をのりこえようという騒ぎが聞こえる。

先頭きった一人が木箱にのぼり、頂部の鉄線に手をのばした。

と、

(バイクもいーなー)

「コントロール！ スイッチを入れろ！」（没原稿）

「コントロール！ スイッチを入れろ！」（没原稿）

2016年9月30日 リステラス星圏史略（創作）

「コントロール！ スイッチを入れろ！ 国有地の探知システムに切り換えるんだっ」

塀にあいた出口から流れ出す兵のかたわらで、指揮官とおぼしいのが通信器にどなっている。

「火を消せ！ 一班は追尾掃討。二班、機密をもらすな。死体は持ち帰れ！」

「隊長。息のある者はわれわれ《センター》に、生体実験用にもらいうけたいものですだな」

「……聞いての通りだ、とどめはさすな。」

すぐに終わります、博士、と、隊長と呼ばれた男は傲岸な白衣の人物にふりかえり、

「馬鹿どもが。チンピラ同士の抗争と、わざわざ場所を開けておいてやれば図に乗りおって…」

塀の外ではばかりもなく響いているきはじめたのは、銃声...それも皆殺しのための軍用マシンガンであると、彼にはわかる。

腹立たしげな男の口調をさえぎって

「失態だぞ。緑衣隊。体制に逆らう能ナシどもなぞ、はなから撲滅しておけば面倒のないものを」

「そうは言いましても、徴兵令がなったあかつきには、ああいった連中が役に立つ兵になるものでして」

"博士" は鼻を鳴らす。

「ヲン。...ところで、システムの稼働効率が見たいが」

「では、モニター室へ？コントロールへ。」

ふたりの姿がドアの中へ消えたあとも、銃声、悲鳴、かなり離れたところであがる単車のエンジンの爆発音...

唐突にはじまってしまった阿鼻叫喚がつづくあいだ、彼はただじっと闇のなかにうずくまっていた。

敵の氣息をうかがう、獣の両眼をして。

(何故だ...?)

疑問を、ながく持ちつづけるのは危険だと知っている。

生きのびるためには切り捨てることだ。不必要に考えこんだところで、戦闘は、はじまらない。

とりあえずここをどうやって抜け出すか。

探知システムなるものが存在し、攻撃モードにきりかわっている以上、へたに動けば文字通り命とりになる。

すくなくとも今はまだ、彼のいる場所は安全であるようだ。

侵入したこと自体がバイク炎上にまぎれて悟られていないのだろう。

が、夜が明けるまで待つては意味がない。

闇にまぎれて... しかし赤外線装置は？

と、永遠にもおもえる長いながい静寂のあと(実際には小一時間ほどだったのだろう)、わずかに光がさして、むこうのドアから巡回中らしい警備兵がやってきた。

さきほどの、《緑衣隊》とよばれた制服である。

いちか、ばちかだ。

彼は身を伏せて間合いをはかる。

とびかかり、ヒジをまきつけて、絞めおとす。

認識証のついた上着と帽子をうばいとり、さるぐつわを嚙ませて暗がりにほうりこむ。

兵のきた道をたどって研究所の建物へ。

行くさきは、コントロールだ。

破壊してしまえば脱出は容易になる。

~~—はやる心をおさえ、気を全身にはりめぐらせて、あえてひそやかに歩く。~~

どうやら地上部分はおもに兵員や研究員の宿舎などにのみ使われているらしく、学校のグラウンドほどの敷地をひとめぐりしてみても扉の内部にはこれといって変わったところすらない。

~~—どう見ても地方の、少ない予算に泣く、くたびれた実験施設で。~~

警戒のための罫としての外周...国有地...とそして、主要部分は地面の下なのだろう。

ややあってようやく彼は地底へのエレベーターを見つけた。

最下層へ。

(うーむ、まるでゲームブック...) (1987.05.15.会社サボリ。)

(うーむ、まるでゲームブック...) (1987.05.15.会社サボリ。)

2016年10月5日 リステラス星圏史略 (創作)

このあたりはまだ建物の入口に近いせいか警備はいたって手薄だ。

そとの騒ぎの影響もあるのだろう。

廊下の角を曲がったところで、《隊長》に敬礼をささげつつ、いれちがいにやって来る兵士のすがたを見つけた。

いちか、ばちかだ。

壁に身をよせて間合いをはかる。

まがりしなに跳びかかり、ヒジをまきつけて絞め落とす。

認識証のついた上着と帽子をうばい、シャツで縛りあげて暗がりへ放りこむ。

(.....くそっ。どっちへ行った!?)

しかし手間どってしまった。

あわてて追ってはみたが案内役はとうに見えなくなっている。

目的は、コントロール。この建物の中心だ。

秘密基地内に標識地図なぞ、はりだされているはずもなく、建物の全体像すらわからないでは、ここは完全な迷宮だ。

カンで、走った。

つきあたりの右にエレベーター。

表示はいましもB-7にうつって停まったところ。

(.....地下！)

箱の中になるベーターは危険だと本能が告げていた。

ふりかえり、階段をさがす。非常扉の緑色。

走った。

ほとんど、飛びおりの勢いで。

もともとの追手が全滅しきらない今のうちだけがチャンスだろう。自分はやつらの仲間ではないなぞ、言ったところで意味はない。

ここをどうやって抜け出すか。

訓練された兵の強さなら身をもって知っている。

それよりこわいのがコンピューターで、指揮系統さえ殺してしまえば、一対一なら逃げきれ
る。

つまりは、コントロールの破壊。

脱出するためにはそれしかなかった。

(うーむ、まるでゲームブック...) (1987.05.15.会社サボリ。)

(#ココカラ先ノ一般兵ノタチイリハ禁止サレテイル。)

(#ココカラ先ノ一般兵ノタチイリハ禁止サレテイル。)

2016年10月5日 リステラス星圏史略 (創作)

#ココカラ先ノ一般兵ノタチイリハ禁止サレテイル。

ぱすわどオヨビ進入目的トソノ命令者ヲ右手ノこんそおるニ入カシナサイ。

クリカエス。ココカラ先ノ... #

「うるせエ！」

彼は低いこえで怒鳴った。

気のせくあまり注意のあまくなった自分に腹をたてている。

カタリと、警告をくりかえしながらレーザーの銃口がかまくびをもたげ、

ぱすわあどヲ！

聞きながら、冷や汗をうかべて彼はとんぼを切って逃げだすタイミングをみていた。

まにあわない。

一瞬、さすがの彼も血のけの引くおもいをする。

そのとき。

眼前を黒いものがさえぎり、熱線に焼かれて地に落ちた。

ドサリと重い音がする。

どまんなかを射ぬかれて炎をあげる、つまりは彼の楯になったのだろうそれは、どう見ても分厚い、まじめな学生カバンのかたちをしていた。

「……………」

視線をあげる。

すぐその脇道から男がひとり出てきた。

「よっ。危なかったな」

通信機かなにかだろう、マイクとアンテナのついた金属のバンドを頭にまきつけ、ひとの良さそうな白い歯でわらう。

「あ～あ、ひでエな。教科書が全滅だ …は、また新しく買えばいいとして、

うわー！ 生徒会の書類があっつ…！！」

火を消しとめたカバンの中身を悠長にかきまわす相手を、彼はなかばあきれ、なかば感心した眼でもって観察していた。

夏物とはいえ黒いズボンの折り目の正しさはたしかに制服で、ノリのきいたワイシャツの胸章は市立一中の三年の色をしている。

ハーフである彼とおなじほどの身長だ。

厚みはむしろ勝っているくらいだろう。

「さすがに、これは無事か」

なにかを確認すると安心したらしく、息をついて、きっちりと顔をあげる。

「失礼した。おれは、会田正行だ。とりあえず無事でよかったな」

聞いて、かすかに表情がうごく。

あいだまさゆき。

この市にいれば誰でも耳にする。つまり相手はたんに名乗ったわけではなく、おのずと身分たちばをあかしたことになる。

「あんたが、か。」

了解のしるしにひとつ肯いて。

「オレは杉谷だ。杉谷好一。」

「知ってる。二中の転校生だろ？」

"喧嘩の杉谷" といえはすでに名前はとどろいている。

学生たちやツッパリは、えらく気のあらい一匹狼がやって来たと、そして、過去（昔）を知っている大人たちは、八年前のあの事件の、招かれざる子供が予想どおり、たいした不良になって還ってきてしまったと...

「立ち話をしている場合じゃないよな」

~~—ひきくらべるに育ちのますぎるほうが、自分で苦笑して彼をうながした。~~

~~—会田家の総領息子である。~~

~~—江戸の時代の藩主の家柄だったというから、どう軽くみても二百から三百年。ひよっとしまふものなら十世紀ちかい権力の重みを掌握してきたという、この盆地きつての名族だ。~~

~~—"旧主家" にたいする地元民の、崇拜にちかい扱いは、アメリカで育ってしまった人間には、いまひとつ慣染めないものではあったが...~~

~~—なんにせよ、世が世であればこの国の王太子である、と、通信機にむかって手早く指示をだす...めのまえの相手の氏素性は告げている。~~

~~—"力" を維持するための、それだけの教育は受けてきたのだと、みてくれの年齢よりもはるかに重厚に押しだしてくる何か、彼に~~

くらべるに育ちの良すぎるほうが、自分で苦笑して先に行動をおこした。

彼のつけているIDの番号を読みとって通信機にむけて何ごとか指示をだす。

「コントロールに行こうとしてたんだろ？」

彼、杉谷の来たのとは違う道をとって正行は歩きはじめた。

とうぜん、彼はついてくるものだと思っている。かなりの速歩である。

「あそこは今さっき片づけてきた。コンピューター本体のほうは仲間がおさえてる」

「こっちだ、急げ。カバン放ってくれ！」

「こっちだ、急げ。カバン放ってくれ！」

2016年10月6日 リステラス星圏史略 (創作)

カタリと、警告をくりかえしながらレーザーの銃口がかまくびをもたげ、

ぱすわあどヲ！

聞きながら、冷や汗をうかべて彼は、とんぼを切って逃げだすタイミングをみていた。

まにあわない。

一瞬、さすがの彼も血のけの引くおもいをする。

そのとき。

眼前を黒いものがさえぎり、熱線に焼かれて地に落ちた。

ドサリと重い音がする。

どまんなかを射ぬかれて炎をあげる、つまりは彼の楯になったのだろうそれは、どう見ても分厚い、まじめな学生カバンのかたちをしていた。

「……………！？」

視線をあげる。

すぐそこの脇道で男がひとり腕をふっていた。

「こっちだ、急げ。カバン放ってくれ！」

燃えているのを蹴って飛ばし、はしる。

「よっ。危なかったな」

通信機かなにかだろう、マイクとアンテナのついた金属のバンドを頭にまきつけ、ひとの良さそうな白い歯で笑った。

夏物とはいえ黒いズボンの折り目の正しさはたしかに制服で、糊のきいたワイシャツの胸章は、市立一中の三年の色をしていた。

ハーフである彼とおなじほどの長身だ。厚みではむしろ勝さっているくらいだろう。

ふりまわして火を消しとめ、

「コントロールに行こうとしてたんだろ？ 脱出したいなら、利害は一致してるんだ。すこしばかりつきあってくれないか？」

つきあって、もらう、と、質問形で断言して、歩きはじめた人間は、とうぜん彼はついてくるものだと思っているらしい。かなりの速歩である。

ほかにしようもなく、追った。

あいては、彼のつけているIDの番号を読みとって、通信機にむけてなにごとか指示を出したりする。

「...時間がかかりそうだ。しばらくはおれのそばを離れないでくれ。半径二メートル以内はシステムが死ぬようになっている」

「わかった」

どうやら他にも仲間がいるらしい。

照明だけの、ひとけのない廊下を、ふたりともほとんど足音もたてずに進んで行った。

「外は、どうなってる。どのくらいやられた？」

殺人システムはできるかぎり素早く停止させたんだがと、何より気遣わしげに訊いてくる。

「ほぼ全滅だろう。兵隊が一個小隊、出ていたし、逃げだすより一斉掃射のほうが速い...」

「.....くそっ!!」

ここは、やつらは、何者なんだ。

彼が疑問をこえにするまえに、相手はひどく悔しげに、歩きながら壁にこぶしを叩きつけていた。

「とめる、べきだった。利用したことになっちゃった...!!」

もともと、そこは、ただの田舎の工場であったはずなのだ。

日本海側に陸あげされた素材を集積、二次加工したのち大都市近郊へとはこびだす。

付属の実験施設でこそ、たしかに衝撃テスト用とかでひとむれのサルを飼育してはいた。が、そのていどの無気味さは、つまり手前にひろがる国有地のひろさ暗さもてつだって...度胸のある子供なら、いちどは肝だめしの冒険に出かけてこようかという...そういう類のものであったのだ。

ぜ~~~~んぶ会田サンが悪い!!

☆ O市産 製薬会社 ...のセンは "A n o t h e r" のO市全滅の件で使いましょう。

(語られるべきことは実に多く、) (高校?)

(語られるべきことは実に多く、) (高校?)

2016年9月29日 [リステラス星圏史略](#) (創作) [コメント \(1\)](#)

語られるべきことは実に多く、一旦、腹を決めてしまうと、そいつは結構雄弁な奴で、それでいて決して不必要に話を長引かせるというのでもない。時折りはさまれる鋭い問いと、濁りのない真っ直ぐな答え。...話種は多岐に渡った。

夜は沈黙を守り更けて行く。既に一升瓶の二本や三本は脇に転がっても、無頓着に手酌で飲み続けて顔色ひとつ変わらない。未成年が、中学生の筈が、二人共に大したウワバミぶりだった。

「その動向に関して朝日ヶ森の首脳陣では...」

時折りの身振りを交えて熱心に語る、自分を救った相手を、彼はじっと見つめていた。

相手は正行（まさゆき）と名乗った。会田家の総領息子である。

その、純日本的な感覚はむしろ "マフィア" に馴染んだ米国産の彼を途惑わせはしたが...いずれ実力の裏打ちがあった上で喋っている内容だという事は、物腰態度の歳に見合わぬ落ち着き具合いからも容易に見てとれる。

(そう観察している彼自身とて自分を十四歳などという馬鹿げた年齢通りに考えているわけではなかったが。)

何にも増して相手は危地に陥っていた彼、後には『喧嘩の』等という即物的なまでの二ツ名で恐れられる事になる、他ならぬ杉谷好一自身を、見事な手際と判断で、救い出したのだ...

杉谷は緑衣隊と呼ばれる男達の、表情の冷たささえ統一され切った酷薄な "処置" を思い出して、チラと胸の包帯の白さに眼線を走らせた。

彼一人以外、すべて死んだ。

リステラス星圏史略
古資料ファイル
5-2-5-0-X
「街の外れの高い壁」
（「会田サン」ver.）
（没原稿）
（1987）

<http://p.booklog.jp/book/110147>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉
as 榎 真谷人 ⇒ 遠野 真谷人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110147>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/110147>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ